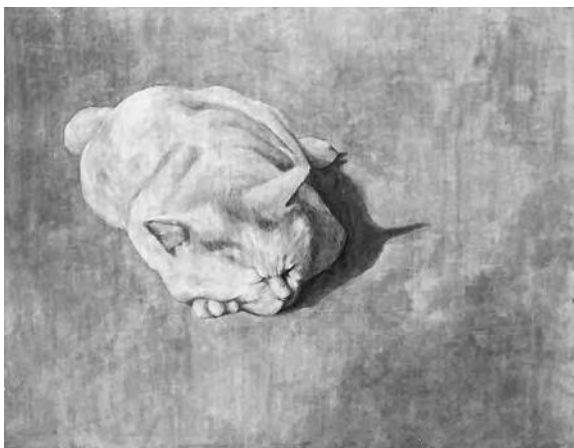


Pay it forward (ペイフォワード)

県教育庁義務教育課長

川 上 慎 治



倉庫で探し物をしていると、懐かしい「紙芝居」を見つけた。
 “Long long ago, an old man and an old woman lived in a small village.”と、物語は始まる。

初任者として勤務した学校で使用した英語の教材である。過去形の導入で昔話を取り入れたら面白いのではないかと考え、英語で紙芝居をやろうと用意したものである。稚拙な授業案だが、規則動詞で構成し、発音が「It」「I」の3種類を含むものを組み込み、生徒がそれに気づくことができるよう工夫した。しかし、肝心の紙芝居が作成できない。なにせ絵は不得手で、図画工作は小学校時代からいつも「今少し」の成績だ(この評定がわかる人は少ないだろうが)。困った私は、自力作成を早々にあきらめ、イラストが得意なS先生に頼み込んだ。授業日まであまり日にちがない図々しい依頼であったが、困っていた私を見かねて引き受けてくれた。その後も学級経営や授業づくり等について、よく相談させていただいた。大きな学校ではなかったが、新採用教員が何年も連続で配置され、先輩教

員に育てられた教員が次の若手を育てるといった風土が根付いた学校であった。温かさの中にも厳しさがあり、授業公開後の研究協議では「そもそも教材研究不足である」と厳しく指導されたが、「私ならこう行う」とわかりやすく代案も示してくれた。当たり前のことではあるが、N先生には、「授業がうまくいかないのを子どものせいにしてはならない」と教えられた。ここでの勤務がその後の基礎となった。

以前「ペイフォワード」という映画を見た。社会科の教員が中学生に「もし君たちが世界を変えたいと思ったら何をするか」と課題を与える。主人公のトレバーは「人から受けた善意を本人に恩返しするのではなく他の3人へ、そしてその3人がそれぞれ別の3人へと受けた善意を広げていく」というアイデアを考え実行していく。

お世話になった多くの先輩教員に何一つ「恩返し」できていない私だが、少しでもペイフォワード(恩送り)できるよう、授業づくり等について、ぎっくばらんに語り合うことができる風土を学校に築き、広げていきたい。